

兒童に對する言語

東京 和田 藏子

子供と申すものは、いつも、周圍の事物によりて、熾なる探求心を満足させんといたします。此心は極めて大切なもので、漸く五官の練習を積み、觀察の力を養ひ、善美の理想を造る等、皆此心に基くといふ程であります。

すなはち子供は、稍長き說話をも能く樂しみて聽くもので、此時代に於ては、先づ他人の言語を聽き取るのを以て、基礎とするのでありますから、母保姆乳母の如きは勿論、周圍の人々は勉めて言語につき、心掛けなければなりません。假令兒童に對して、いふのではなくとも、傍に在る時は、自然之に化せらるゝものであります。今これにつきて心づきたる事柄を述べて見ましやう。

一、正しい語を用ゐる事。これ兒童の言語は省略せる所多く、甚だ不正でありますから、發達に伴ひ、相應に導かねばなりません。甚だしきは、兒童の周圍に在るもの、故ら之を模することを屢々見聞しました。

二、了解しやすき言語を用ゐる事。若し妄に理解しがたき語を用ゐるときは、これ効なきのみならず、兒童をして、疑惑を生し又は誤解せしむることがあります。

三、激烈なる語勢、其他野鄙な言語の如きはつとめて、慎むべき事。此等は極めて精密に聽き取りて摸擬するものであります。前に申しました通り、他人に對して、いふとするも、他日化するものであります。

なほ子供に對する言語については、色々ござ

いませうが、右は幼稚園時代の子供についての、僅かの觀察でございます。

幸福とは何んぞ

東京 林 壽 祐

吾が少年の折嘗て土用休暇に際し家にあり、悠々と横臥しながら、能くニウナシヨナル、リーダ第三卷を復讀したり。第二課は『是レハ甚ダ難クアル』といふ題なりき當時吾は甚だ無頓着に復讀したりしが吾が母は傍にありて之をき、頗る感動したり、此談話の大意を左に記さんに。

『チエームスといふ小兒が、或時食卓につき、牛乳を飲みつゝ嘆息した』他の小供が甘い食物を食ふのに、己れは獨り麵麩と牛乳ばかりで、甘い食物は何にも無い、つまらないな—他の小供は朝何に

も爲ないのに、己れは獨りこんな寒い朝でも早く起きて働かなけりやならない、つまらないな—。他の小供は櫛で雪の上を行くのに、己れは獨り寒い中をブル〜どふるへながら歩いてばかり往たり來たりする、こんなつまらない事は無い」と時にチエームスの母が、側で衣服を縫つて居つたが之を聞き『そりやお前大變幸福な事ではないか、世の中には食ひたくも、何んにも持たないものが澤山あるのに、お前は食ひ物には不足がないし。又世の中には、家も小屋もなく、寒い風の吹く地面の上に寝るものあるのに、お前はかうして、屋根も床もある家に寝るではないか。又世の中には盲者もあり聾人もあり、或は病氣に罹つて、毎日痛み苦んで居る者が澤山あるのに、お前は目に見えるし、耳は聞えるし、さうして丈夫で充分働